

## ニュージーランドにおける性別分業の変容と スプリングボック・ツアー事件

大谷裕文

### はじめに

2012年10月25日、朝日新聞は、「男女平等ランク、日本101位に転落 上位4位は北欧」というショッキングな見出しの記事において、「ダボス会議を主催する世界経済フォーラム（WEF）は24日、政治、経済、健康、教育の4分野での男女平等の度合いを評価した〈男女格差報告〉の2012年版を発表した。日本は対象となった135カ国のうち101位で、昨年より3つ順位を落とした」ことを報道した（朝日新聞2012年）。さらに続けて、この記事は、101位という「最低水準」にまで順位を落とした理由および主要国の順位を簡潔に次のように報じている。

報告は日本について、女性の議員や企業幹部の少なさを指摘。政治の項目では110位と最低水準だった。女性の教育レベルが高いにもかかわらず、労働市場でうまく活用されていないため、教育投資に見合う利益が出ていないと指摘。男女の雇用格差をなくすことで、日本の国内総生産（GDP）が16%増えるとの研究結果を紹介した。1位はアイスランド、2位以下はフィンランド、ノルウェー、スウェーデンで、北欧諸国が上位4位を占めた。米国は22位、中国は69位、韓国は108位で、最下位はイエメンだった。

上記の記事には出ていないが、過去15年間、フィールドワークの為に筆者が

頻繁に訪問している国、ニュージーランドは、ランキング6位（2007年から2010年までは5位）に位置しており、世界経済フォーラムが公刊している英文報告書（The Global Gender Gap Report 2012）の中でも、「ニュージーランドは、グローバル・ランキング・トップ10の中に入る国として、ランキング8位のフィリピンとともに、引き続きアジア・太平洋地域のリーダーである」というきわめて高い評価を与えられている（WEF, 2012: p.26）。

「ニュージーランド・男女平等ランク6位」という WEF の格付けは、決して過大な評価ではなく、オークランドにおける性別分業の「平等性」を明らかにした最近の9家族実態調査結果（大谷2011年）から判断しても、十分に納得のいくものであると言える。しかしながら、1960年代以前の古いニュージーランドは、性別分業に関して「平等的な社会」であった訳ではなく、むしろ「資本主義的家父長制を基盤とする高福祉社会」の典型例として広く知られてきた。したがって、ここで浮上してくる疑問は、「資本主義的家父長制を基盤とする高福祉社会」から「ジェンダー・イクオリティの社会」へ、ニュージーランド社会がいつどのように転換していったのかという問題である。本稿は、このような問題意識に基づいて、ニュージーランドにおける性別分業の変容を歴史人類学的な視点から解明することをその目的としている。

以上のような目的を遂行するために、本稿は先ず、ニュージーランドにおける伝統的な性別分業の非対称性を叙述する。次に、伝統的な性別分業の「不平等性」に対する挑戦を行ったニュージーランド第2波フェミニズム運動の動向を概観する。そしてニュージーランドにおける性別分業変容の契機となったスプリングボック・ツアー事件については、4節で事件の展開過程を述べるが、その前になぜ南アのナショナル・ラグビー・チームであるスプリングボックのニュージーランド遠征ツアーが、国論を二分するほど大事件となったのかを説明するために、3節において、一旦性別分業の問題を離れ、ニュージーランドおよび南アにおけるラグビーというスポーツが担ってきた帝国主義的意味を明らかにする。この3節及び4節の叙述を踏まえて、5節では、スプリングボック・ツアー事件以後の性別分業変容のプロセスが、歴史人類学の基本概念であ

る「ラミフィケーション (ramification)」の視点から、すなわち、大小様々なプラクティス (慣習実践) 及びプラクシス (投企実践) が意味構築, 競合, 対立, 打倒, 転覆, 取引, 取り決め, 再挑戦, 支配, 従属などからなるダイナミックな政治力学の中で激しく絡み合いながら, 一定の社会・文化・政治・経済的な帰結に収斂していくプロセスを重視する視角から叙述される。そして本稿末尾の結語においては, 1980年代に現実に進展したと考えられる性別分業の変容が, 労働党政権による女性省創設という上からの政策的措置と半ば無意識的なレベルで進行した「<sup>h a b i t u s</sup>ハビトゥス」の微細な変移との絡み合いによって方向付けられた可能性が高い点に光を当てる。

## 1. 伝統的な性別分業

19世紀中葉のニュージーランドは, 他の新大陸の移民社会と同様に, 家族単位で集団的な移住が行われたごく少数の入植地 (ウェリントンなどのウェイクフィールド・コロニーなど) とその他のフロンティア地域の間で, 性別分業に関してかなりの違いが見られる社会であったと言えよう。家族が重要な社会生活の単位となっている前者においては, 農業, 木材伐採, 製材, 亜麻刈り, 羊毛刈除, 狩猟, 漁業などの外回りの仕事は専ら男性が担い, 家庭の中の家事・育児は女性が担うという, 家父長型の伝統的な役割分担が行われていた。そして家庭内の余暇の過ごし方も, 読書, ガードウニング, ピクニック, 合唱, 合奏, 室内ゲーム等々, 女性 (母親) が主導する家族単位の「上品な活動」が中心であった (Fairburn, 1989: pp.196-201)。ただし, 性別分業は, ニュージーランドに移住する前の英国のそれと完全に同じという訳ではなく, 性別分業の規範はヴィクトリア朝時代の英国のそれよりもかなり緩やかであり, さらに植民地特有の必要に迫られた女性 (母親) のアクティブな活動, 例えば馬の世話, 乗馬, 海や川の中の仕事, カモ撃ち, カヌー漕ぎなども行われ, 全体的にニュージーランドには「自由な雰囲気」が漂っていた」という (Crawford, 1987: PP.173-176)。とはいえ, 「フロンティア期 (英国植民地期)」のニュージーラ

ンドの家族に見られる性別分業が、女性の「周縁化」と「不平等性」の上に構築されていたという事実を否定することはできない。その後、ニュージーランド植民地の家族に見られた「自由な雰囲気」でさえも、キリスト教女子青年会などの組織が1886年という早い時期から、「母親、妻、主婦、国家建設者、および道徳調停者としての婦人の本当の職務」を強調するある種のキリスト教的イデオロギー運動によって縮減されていった (Thompson, 1998 : p.182)。

他方、上述した家族単位で入植が行われた地域とは異なり、北島のノースランドや南島のオタゴのようなフロンティア地域では、状況はかなり異なっていた。例えば、1860年代の南島オタゴ地域では、住民の圧倒的大多数が、オーストラリアの金鉱山師ガブリエル・リードが1861年に中央オタゴにおいて有望な金山を発見した出来事によって引き起こされたゴールドラッシュの波の中で流入してきた男性（その多くがハイティーンか20代の単身者）であった。夫と共にこの地域に流入し、採金労働者・妻・母としての社会的役割を担っていた女性も、ごく少数ではあるが存在していたことが確認されている。また、採金労働者の夫が事故で亡くなった後、様々な仕事をして自活していた「逞しい女性」がいたことも明らかとなっている (Dickinson, 1993)。しかしながら、全体的に見るならば、オタゴ地域は、女性がきわめて少ない典型的なフロンティア社会であった。このようなフロンティア社会の男性の中には、「深酒に溺れる荒れた生活」を送る者が少なからず見られたようである。中央オタゴのオマラマの近くの居酒屋ジャクソン・インの光景を叙述したエルウェルの次の一節は、そのような「荒くれ男」の典型例を示していると言えよう (Elwell, 1878 : P.151)。

祝宴の後のアイネアースの手下のように、庭の外では草むらのあちらこちらに、数名の酔漢が横たわって眠りこけていた。彼らの真中では、一人の酔っぱらいが暴れ馬を乗り回しながら、大声で喚いていた。やがて、彼は眠っている男の一人を直に馬で踏みつけてしまった。気の毒なことに、その男はひどい怪我を負わされ、呻きながら起きあがろうとした。

先述したように、フロンティア社会においても家族で生活を営んでいる人々は、少数ではあるが存在し、このような家族においては家父長的な性別分業が見られた。しかしながら、フロンティアの男の多くは、バラックに住む単身者であり、日中は金採鉱など危険で劣悪な状況下での重労働に携わり、夜は仕事の重圧から解き放たれて、その日の稼ぎの大半を居酒屋や売春宿で使うといった「荒れた生活」を送っていた。したがって、こういった男にとっての女性は、「居酒屋の女や踊り子」あるいは「売春宿の娼婦」であり、通常の意味での性別分業は存在しなかった (Watson, 1998: P.18)。また、こういったフロンティアでは、ピエール・ブルデュールが強調するところの「男支配」を表象する堅固な男性文化が構築されて行き、狩り、ボクシング、レスリング、様々な力比べ、そして正真正銘の喧嘩など「男らしさ」や「荒々しさ」を強調するプラクティスが重要視されていた (May, 1962: PP.324-326)。

しかしながら、このようなフロンティアの荒々しいジェンダー文化も、19世紀末には徐々に馴化されていく。ワトソンは、こういった変化を「安定化」という概念で捉えている。ワトソンによれば、1870年代に男女の人口バランスという点でより均衡のとれた移住が行われるようになり、ニュージーランド全体において核家族が急増し、その結果、19世紀末になると、人口の流動率の減少と定住化の進行、家父長的で規律正しい核家族規範、女性を周縁化する伝統的な性別分業の再構築、安定的なコミュニティの確立、産業生産における労働規律の強化、大邸宅に住む大地主・富裕な商人・金融業者の出現と階級社会の成立、資本家層の洗練された家庭文化が有する民衆層への衒示の効果（地元民のために催される大きな酒宴、贅沢な趣味、排他的な紳士クラブ創設などが及ぼす影響）等々、によって特徴付けられる「安定社会」が一般化していき、荒々しいフロンティアの行動様式は都市化と産業化の流れを著しく乱すものとして統制されていった (Watson, 1998: pp.19-21)。

「フロンティア期」から安定社会期への移行期に当たる1893年には、世界で初めての婦人参政権がニュージーランドで認められた。しかし、女性を含めた普通選挙法の実施は、「社会実験室」というニュージーランドに与えられた称

号に相応しい、第1波フェミニズムを象徴する画期的な出来事ではあったが、不平等な性別分業の改革を求める運動には繋がらず、むしろニュージーランド植民地における資本と労働力の結合過程の中で逆の方向に作用することになった。というのは、翌年に成立した労働調停仲裁法が、「家事育児を担う家庭内の責任」と「参政権という社会的な責任」を共に有する立派な妻とその子供を養うに足るだけのファミリー・ウェイジ (family wage) を外で働く父親に保証し、必要であるならば労働組合の結成を奨励し、さらに労働調停も行いながら家長である父親の完全雇用を促進することを目指した法律であったので、結果的に婦人参政権実現と労働調停仲裁法の組み合わせが、資本主義的家父長制の枠組の中で伝統的な性別分業をより一層強化することに結びついていったからである。以上のようなプロセスを経て出現した伝統的・非対称的な性別分業は、1930年代から始まった農産物輸出の順調な拡大の上に築かれた「世界に先駆ける高福祉国家」の名声と結びつく形で、第2波フェミニズム運動の胎動が見られるようになった1960年代末まで、大きな異議申し立てを受けることなく「安定的」に存続していった。

しかしながら、ここで注意せねばならないことは、全体的な「安定化」への流れの中で、「労働者階級」の一部において、フロンティア文化が変容を被りながらも性別分業の中に継承されていったというフィリップスなどの議論が存在することである。フィリップスによれば、ニュージーランドの各地の牧羊労働者、羊毛刈除者、羊毛洗浄労働者、農場労働者、森林地帯で働く伐採業者や製材業者などは、「フロンティア期」から続く男中心の文化を継承・保存して現代まで繋がる新時代に受け渡すことに貢献したという (Phillips, 1987)。現代ニュージーランドにおけるジェンダー・イクオリティの大きな問題点として、階層格差、すなわち中間層においては、女性首相 (ヘレン・クラーク元首相など) や女性総督 (デイル・キャサリン・ティザード〈1990~1996〉やデイル・シルヴィア・カートライト〈2001~2006〉など) の誕生を好意的に評価し、自らも育児やトイレ掃除など骨の折れる家事育児のかなりの部分を分担することはあたりまえと考えている男性が多いが、上述した職業の従事者の間では逆の

傾向が顕著であるという「事実」が挙げられている (Minto, 2007)。このような「事実」を考える上で、フィリップスの「フロンティア文化の継続」という見解は注目に値する視点であるが、不用意に「フロンティア文化の継続」を強調する議論に同調すると階級・階層的バイアスを伴った文化本質主義の陥穽に陥る危険性がある。現代ニュージーランドの「労働者階級」の一部にフロンティア文化的要素が見受けられるとしても、それは、あくまでも深く身体に刻み込まれた「ハビトゥス」によって方向付けられたプラクティスの再生産の結果として解釈されるべきであろう。

## 2. 第2波フェミニズム運動の動向

いわゆる第2波フェミニズムと呼ばれるフェミニズムの思想・運動は、幅広い社会・政治；経済的な性差別からの女性の解放を求めて、アメリカ合衆国やヨーロッパでは1960年代半ばに広がりを見せ始めたが、ニュージーランドでは欧米からの地理的遠隔性もあって、第2波フェミニズムは数年遅れて1960年代末に姿を現し、1970年頃に台頭し始めた (Holmes, 2000: p.235)。このニュージーランドの第2波フェミニズムの特徴は、利益集団中心型のアメリカ・フェミニズム、イデオロギー中心型のイギリス・フェミニズム、政府平等政策型のスウェーデン・フェミニズムなど、先行する欧米フェミニズムの動向の全てを導入し、イギリス型を基軸としながらそれら全てを巧みに融合させていったこと、その結果、各フェミニスト・グループは離合集散を繰り返したので各グループの明確なカラーが現れるのに少し時間がかかったことである。それでも1970年代半ばには、マオリ・フェミニスト、社会主義フェミニスト、マルクス主義フェミニスト、リベラル・フェミニスト、レスビアン・フェミニストなどのグループが旗幟を鮮明にし始めた。マオリ・フェミニストの代表は、ドナ・アワテレ (Donna Awatere) であり、ニュージーランドにおいては、マオリ (先住する人々) とパケハ (太平洋アイデンティティを獲得した結果新たに誕生した白人) の関係をめぐる人種問題が最重要であり、主権を伝統的な「英国国王

主権」から新たな「マオリ主権」に転換しない限り、植民地主義の桎梏を取り除いた「ニュージーランド人」としての真のジェンダー問題の解決はあり得ないことを力説した。なぜならば、白人フェミニストが退ける男中心文化は、マオリ族から見た白人文化と同一であるからである (Simpkin, 1994)。マルクス主義フェミニストは、資本制的生産様式が必然的に内包する男女不平等を止揚する為には、階級闘争と共に男性支配に対する闘争が必要であると考える点では、欧米のマルクス主義フェミニストと同じであるが、ニュージーランドのマルクス主義フェミニストの特徴は、そのかなりの部分が、植民地主義を脱するために「マオリ主権」を受け入れ、ドナ・アワテレなどのマオリ・フェミニストと連携していく必要があると考えていたことである (Simpkin, 1994)。リベラル・フェミニストは、男性への対決姿勢は概して弱く、一般に男女の不平等な関係は、リベラルな社会的、政治的、法的改革を通して十分に是正することが可能であると考える人達であり、ニュージーランド・フェミニストの多数派を構成していた。一方、少数派のレスビアン・フェミニストは、男性によって押しつけられた「女性性〈フィーメールネス〉」の徴表を拒絶し、ヘテロセクシュアリティとの対抗の中で独自の「女性性〈フィーメールネス〉」を取り戻すことを強調する傾向が見られた (Dominy, 1986: pp.29-35)。

1970年代にはまた、以上のようなフェミニストの様々な主張を掲載する幾つかの雑誌も刊行されるようになった。オークランドで発行された「ブロードシート〈Broadsheet〉」は、フェミニスト各派の主張を網羅的に掲載する雑誌として、かなり広い読者層をもっていた。ダニーデン女性コレクティブという団体が南島のダニーデンにおいて発行していた「ウーマン」という雑誌も様々な立場の主張を折衷的に寄せ集めた雑誌であった。一方、マルクス主義フェミニストとレスビアン・フェミニストが発行していた「ビッチズ・ウィッチズ・ダイクス〈Bitches, Witches, and Dykes〉」という雑誌は、ラディカルであったために短命に終わった。また、1973年、1975年、1977年、1979年に開催された連合女性大会 (the United Women's Conventions) は、上述した様々なグループに属する多くのフェミニストの参加 (毎回1500名から2000名) を得て、大きな盛

り上がりを見せた (Holmes, 2000: p.236)。以上のように1970年代には、雑誌や大会を通してフェミニストの側からの主張、とりわけ「男性・女性関係は、政治的であり、決してナチュラルのものではない」(Holmes, 2000: p.236) というフェミニスト各派の最大公約数的主張が積極的に発信されていき、伝統的な性別分業への露わな挑戦が初めて本格的に展開されていった。しかしながら、このような伝統的な性別分業への挑戦が、「一般の人々」にインパクトを与えることはほとんどなかった。というのは、フェミニストの活動を報じる新聞やテレビなどの報道内容の多くが、「ジェンダー・バイアス」を含んでいたので、「フェミニストはみな男嫌い」、「フェミニストはレズビアンの人達」、「フェミニストは良き秩序を壊す危険分子」といったステレオタイプが人々の中に定着していき、結果的に多くの人々は、フェミニズムは自分たちとは無関係だと考えたからである<sup>1)</sup>。ところが、「旧来の男女役割分担は当たり前」という1970年代の一般の人々の「常識」を揺るがす大事件が、1981年に起こった。それは、今でも巷で語り継がれている1981年のスプリングボック・ツアー事件である。

このスプリングボック・ツアー事件がニュージーランドの性別分業の変容に及ぼしたインパクトは、後に考察するが、「はじめに」において述べたように、次節では、南ア・スプリングボックのニュージーランド遠征ツアーが、なぜあれほどの大事件となったのかを説明するために、両国におけるラグビーが担ってきた帝国主義的意味を明らかにしておきたい。

### 3. ラグビーが担ってきた帝国主義的意味

ニュージーランドは、「フロンティア期」から自治領期〈Dominion〉(1907年～1947年の半独立国家期)を経てウエストミンスター憲章承認(1947年)によって実質的な独立国となるまで、カナダやオーストラリアとともに、大英帝国内の文字通りの重要な前哨基地として位置づけられていた。しかし、壮健な身体と鍛えられた精神を有する植民地の人間という表象は、帝国の中核部側の願望であり、実際には「フロンティア期」からヨーロッパ系ニュージーランド

人は、アジアへの漠然とした恐怖感（黄禍論）およびそのような恐怖感から派生したアングロサクソン衰退論、すなわちアングロサクソン民族は形質的・道徳的な資質という点で衰退しつつあるのではないかという集合的な不安感に苛まれていた（Watson, 1998: P.20）。このような「民族衰退」に対する解毒剤として、逞しくかつ規律の厳しいスポーツ活動が、この民族に軍事的・人口学的な闘争に向けての備えを与えてくれる最も重要な手段となると考えられていた。このような政治的および軍事的な観点から、19世紀末に「模擬戦闘」としてのラグビーに注目が集まり、前哨基地としての役割を維持・強化する最善の訓練方法は、「国技」としてラグビーを振興することに他ならないという考えが支配的となっていった。このようにして、ラグビーは、性別分業という観点から見るときも、男らしさを表出する最も重要な文化形態となっていった。ワトソンは、フィリップスを引用しながら、この文化形態としてラグビーの重要性を次のように説明している（Watson, 1998: P.21）。

フィリップスは、ラグビーがニュージーランドでは規律正しい（そして訓育的な）男のレクリエーションの主要な文化形態となったが、それは一つにはラグビーがニュージーランドのフロンティアにおける荒々しい男らしさに訴えかけたからであると論じている。さらに、帝国のエリートの視点からみるならば、そのような肉体的な競技は、帝国の維持にとって極めて重要な植民地の男達の活力を保存するものであった。しかし、それはまたこのような活力を鍛えて、職場であれ戦場であれ、当該の権威を受容させるためのものでもあった。競技の暴力を制限しながら方向づける規則の賦課、集権化されたラグビー・ユニオンの発展、酒盛りを制限する試み等々、これらは全て規律を植え付けるための文化政策と見なされ得るであろう。19世紀ニュージーランドの経済発展の水準もまた、ラグビー人気の理由を明らかにする上で役立つであろう。フロンティアのグラントは凸凹の状態になりがちであり、特に森林地帯や湿潤地帯ではそうであった。しかしラグビーは、サッカーほど荒れたグラントの影響を受けることはなかったのである（Phillips, 1987: 91）。こういった荒れやグラントが

水浸しになる頻度等も、結局はヴィクトリア式規則（現在のオーストラリア式）を捨て去ってしまったことの原因であろう。その競技では、選手はボールをバウンドさせることを求められ、かつ上方を見ながらよく走り回らなければならないのである。

以上のように、ラグビーは、ニュージーランドにおける植民地主義言説において不可欠かつ最重要の男性メタファーとして定着していったのであるが<sup>②</sup>、ラグビーをめぐる状況は、大英帝国植民地として共通の問題を抱えていた南アにおいても基本的には同じであった。

南ア共和国においても、ラグビーはニュージーランドのそれと同じくらいに重要な男らしさを表象する文化形態となっており、その重要性は、南アの世界的に有名なラグビー・ユニオン・ナショナル・チームであるスプリングボック<sup>③</sup>の異常な人気の高さに伺うことが出来る。スプリングボックは、1987年に始まったラグビー・ワールド・カップでは、1997年と2005年に2度優勝している強豪チームであり、同じく世界的に有名な強豪チームとして知られるニュージーランドのオールブラックスに対しては、旧イギリス植民地の名門ラグビーチーム同士として、とりわけ激しいライバル意識をもっており、これまで熱い闘いを繰り広げてきた。

スプリングボックというチーム名が初めて使われたのは、1906年9月から1907年1月にかけて行われたイギリス本国遠征時のテストマッチにおいてである。テストマッチと言えば、予行練習試合のような響きを持っているが、それは英国植民地のチームが宗主国イギリスのチームとプライドをかけて闘う真剣な本番試合を意味している。この最初の宗主国遠征においては、全部で28試合が行われ、スプリングボックは、25勝4敗1引き分けという驚異的な強さを発揮した。1906年10月10日に行われた、ニューカッスル・ノーサンバーランド・チームとの第5テストマッチでは、縦の突破力を活かして、実に44対0という圧倒的な大差で勝っている (<http://www.world-rugby-museum.com>)。

以上に述べたように、最初のスプリングボック・ツアーが行われたのは、

1906年から1907年にかけてであるが、大英帝国とスプリングボックの関係を考える上で、1906年～1907年という時代性に目を向ける必要がある。英国の著名な経済学者、ジョン・アトキンソン・ホブソンが、1902年に出版した『帝国主義論』の中で論じているように、世紀の転換期から20世紀初頭にかけての時代は、激しい植民地再分割が行われた帝国主義の調整期であった。南アでは、1899年から1902年にかけて、ボーア戦争が続いたが、この戦争は、大英帝国が、アフリカーナと呼ばれるオランダ系住民が建国したトラスバール共和国とオレンジ自由国を奪い取ろうとした闘い、すなわち典型的な植民地再分割戦争であった。南アが大英帝国植民地となつてからは、英国系白人入植者とオランダ系白人入植者（いわゆるボーア人あるいはアフリカーナ）は、対立感情を抱きながらも、先住のアフリカ系諸民族に対しては少数者として結束するのを感じていた。この少数者としての白人男性の結束シンボルがスプリングボックであった。

少数者としての白人男性は、共通の利害に基づいて、幅広い人種隔離を実現するための法を制定し、それによって特権的な地位を享受する道を選択した。1948年、この人種隔離政策は一段と強化され、悪名高い「アパルトヘイト」政策となった。このアパルトヘイト政策は、ネルソン・マンデラが率いる「アフリカ民族会議」の圧力に屈して、ボーア系大統領であるデ・クラークが1991年に「アパルトヘイト」撤廃を宣言するまで存続することになった。

アパルトヘイト政策を掲げる南アは、世界各地で種々の問題を引き起こしてきた。南アとニュージーランドは、類似した植民地主義文化を持っていたが、「人種問題」に関しては、両国の間で若干の違いが見られる。1921年、スプリングボックが、初めてニュージーランド・マオリチームと戦ったとき、ヨーロッパ系ニュージーランド人の多くはマオリを応援したが、これを見た南アの記者が、「全く信じられません、白人が先住民チームを応援しています、いったいこれはどういうことでしょうか」という記事を書いたが、この記事が両国の間で大問題となった (<http://www.world-rugby-museum.com>)。南アは、1970年までは、マオリの入国を認めていなかったため、ニュージーランド・オールブ

ラックスは、最も中心的なプレイヤー（ジョージ・ネピアのような伝説的なマオリ人プレイヤー）を遠征チームから外してきた。このような状況に対して、1960年には、マオリ人プレイヤーの派遣を求める署名運動が行われ、15万人のニュージーランド人が署名するという出来事も起こった。1970年、南ア政府は、マオリに「名誉白人」のステイタスを与えて、入国を認めるという特別措置をとった。これに対して、ニュージーランド国内では、マオリは、世界の先住民の中で、最も大きな発言権を有している「例外的な先住民」であるので、「名誉白人」などという人権を無視した不名誉なステイタスを認めるべきではないという世論が巻き起こった。以上の行論から明らかなように、南アとニュージーランドは、極めて深く密接な関係を維持して来たが、同時に、人種問題に関しては、古くから多くの深刻な対立の火種を抱えてきたのである。

#### 4. スプリングボック・ツアー事件

定期的に交流戦を行ってきたニュージーランドと南アのラグビー・ユニオンは、慣例に従って、ニュージーランド・ラグビー・ユニオンが、1981年は南アのスプリングボックをニュージーランドに招待するという計画を公表した。総選挙を間近に控えていた当時のマルドーン首相（ニュージーランド国民党党首）は、スポーツ不介入という巧妙な手法によって、実質的な支援をおこなう政策を打ち出してきた。これに対してニュージーランドの諸メディアが、アパルトヘイト支持の南ア・チームを招待することを批判する報道を開始し、海外メディアも、ニュージーランド・ラグビー・ユニオンが南ア・チームと試合を強行するのであれば、ニュージーランドも南アと同様に世界の孤児となるであろうという論陣を張って、マルドーン首相とニュージーランド・ラグビー・ユニオンを牽制した。しかし、それにもかかわらず、マルドーン首相は、「ニュージーランドは民主主義国家であるので、政治がスポーツに介入することは絶対に許されない」という口実の下に、実際にはスプリングボック・ツアーを支援し、逆に諸外国メディアの内政干渉を批判した。このような挙に出たことから、

「マルドーン首相は、強くて果敢なリーダーとして自分を選挙民に呈示する絶好の機会としてこのツアーを利用することを考えていたこととは間違いない」と思われていたようである<sup>(4)</sup>。実際に彼は、不介入を口実とするスプリングボック・ツアー支援について断固とした信念を保ち続けていた。このような態度こそが、主要な支持者、とりわけ国民党地方議員を増大させることに、マルドーン首相は気付いていた (Templeton, 1995: pp.157-158)。彼らは、大英帝国の威光にノスタルジアを抱き、南アの人種差別主義にも内心共感を抱き、さらにアングロサクソンの強壮な肉体と精神を誇示するシンボルこそがラグビーであるという信念を共有していたからである。再選を果たした前回の1978年総選挙は、マルドーン首相にとってもきわめて苦しい戦いであり、かろうじて労働党を抑えた選挙であった。対抗勢力である労働党の党首ビル・ローリングは、長い間、「弱いリーダー」と見られていたが、1978年の接戦以後、地道な政策浸透活動を続けた結果、1981年の段階でビル・ローリングの支持率はマルドーン首相のそれと並ぶところまで回復していたので、前評判では、「古いタイプの政治家で賞味期限の切れているマルドーンの率いる国民党は敗北する」という見方が支配的であったという<sup>(5)</sup>。こういった劣勢を覆すために、スプリングボック・ツアー支援を叫び続けることが、マルドーン首相にとって選挙に勝つための唯一の現実的な選択であったというのが実情であったようである。

というわけで、結局、スプリングボックは1981年7月19日にニュージーランドに到着し、その後、7月22日のギズボーン市での試合を皮切りに9月12日のオークランドでの最後の試合まで、全部で16の試合が行われた。このうち7月25日のハミルトン市での試合と8月19日のティマル市での試合は、あまりにもこのツアーに反対する抗議行動が激しく、結局キャンセルとなった。残りの14試合は、警官隊の嚴重な警備の中で強行され、スプリングボック11勝、ニュージーランド・チーム2勝、引き分け1という結果となり、南ア・スプリングボックの圧勝に終わった。

この間、ニュージーランド史上初めての内乱（シヴィルウォー）と形容されることになった激しい騒乱が各地で繰り広げられ、その結果、国論が二分され

る事態が生じることになった。オークランドやウェリントンのような大都市においてだけではなく、ギズボーン、ティマル、ダニーデンのような中小都市でも、人種差別主義および男に対する女の従属性の象徴としてのラグビーの否定、そしてマルドーン政治の終焉を訴えるダイレクト・アクション（直接行動）が展開されていった。こういった状況の中で、警官隊の警備のあり方に対するメディアや識者の批判、つまりこれほどの規模の騒乱事件を経験したことのないニュージーランド警察が、各地で過剰警備問題を引き起こしたことに対する批判も強まっていった。反人種差別主義、フェミニズム、マルドーン支配反対などの立場、あるいはその全ての立場から、非常に多くの女性が、このダイレクト・アクションの列に加わり、「普通の家庭の主婦」が逮捕され、留置場で一夜を過ごすといったそれまでに見られなかった事態も生じ、結果的に、この出来事はニュージーランドの「ソーシャル・ファブリック (social fabric)」を大きく変容させてしまった (Pringle, 2005: p.2)。

## 5. スプリングボック・ツアー事件と性別分業の変容

それでは、プリングルが述べる「ソーシャル・ファブリック」の変容、とりわけ性別分業の変容はどのようにして進行していったのであろうか。それは、アフリカの乾燥した砂漠が、一夜にして華麗な花畑に姿を変えろというような、短い時間幅の中で生じた激変的なプロセスであった訳ではなく、1981年のスプリングボック・ツアー事件の後およそ10年間に亘って漸進的に生じた、ラグビー論争、スポーツ中継有料化論争、スポーツ・プロ化論争、人種差別論争、ジェンダー論争、国民党と労働党の権力闘争などに纏わる大小様々な出来事のラミフィケーション（絡み合い）の結果として捉えることが肝要であろう。

スプリングボック・ツアー事件は、先に述べたように、人種問題に端を発していたので、事件直後にいち早く顕在化した出来事は、伝統的な白人文化へのマオリ同化・統合政策の見直しを求める要求が、ドナ・アワテレのようなマオリ・フェミニストやマオリ出身政治家によって強く打ち出されたこと、それか

ら従来マオリ問題を語ることをタブー視していたヨーロッパ系ニュージーランド人も、家庭、学校、職場、種々のアソシエーションなどの場で、この問題を語り合うようになったことである<sup>6)</sup>。こういった同化・統合政策の見直しをめぐる議論は、やがて、バイカルチュラリズム (biculturalism)、すなわちニュージーランドという1つの国の中に、マオリとパケハという全く異なる2つの民族がそれぞれの文化を維持しながら共存することを目指す思想の台頭に結びついていった。その後、バイカルチュラリズムは、「1985年ワイタンギ条約修正法 (The Treaty of Waitangi Act 1985)」や法廷などで使用できる公用語の地位をマオリ語に付与した「1987年マオリ語法 (Maori Language Act 1987)」の成立に見られるように、1980年代末にかけて着実にロンギ労働党政権の政策の中に浸透していった。バイカルチュラリズム政策は、1990年以後のボルジャー国民党政権にも受け継がれ、1993年には、新しくオープンしたウェリントンの国立博物館テパパ・トンガレワ (Te Papa Tongarewa) の歴史展示プログラムが、「土地の人々 (tangata whenua)」と「条約によって来島した人々 (tangata tiriti)」に二分されるどころまで、この政策の制度化は進んでいった<sup>7)</sup>。このようなバイカルチュラリズムの制度化によって、少なからぬ数のヨーロッパ系ニュージーランド人のアイデンティティにも変化 (ニュージーランダーからパケハへの変化) が生じるに至った<sup>8)</sup>。

様々な場で人種問題が話し合われるようになった状況と平行して、スプリングボック・ツアー事件の渦中で、ラグビーとフェミニズムの関係をめぐる議論も活発に展開されるようになった。既に前節において、スプリングボック・ツアーに反対した人々の中に、かなりの数の女性が含まれていたことを述べたが、フジュールによれば、これらの女性の間で、「ラグビーは男の抑圧と女の従属を象徴するスポーツ」であるとする新たな見方が広がり、この「内乱」が、それまでラグビーがニュージーランド文化に対して保持していた「鑑」を打ち砕いてしまったのだと言う (Fougere, 1989: 118-120)。このような新たなラグビー観は、スプリングボック・ツアー事件の中で結成された WAR (Women Against Rugby) という女性団体の活動を通して、性別分業の見直しを迫る広

範な動きに繋がっていった。この WAR について、「スポーツとフェミニズム」という研究テーマを追求しているリンカーン大学の社会学教授ショーナ・トンブソンは、次のように述べている (Thompson, 1998 : p.188)。

女性がどのように他者のスポーツに助力を提供するのかという問題についての筆者の認識は、1981年にアパルトヘイトの南アフリカを代表する男性ラグビー・ユニオン・チームが筆者の国で行ったツアーを1人のニュージーランド人として目撃したときに芽生えた。多くの女性が、このツアーに反対する大規模で凄まじい抗議行動に関わり、彼女たちの参加の理由もよく記録されている。この抗議から、WAR (Women Against Rugby) と呼ばれる組織が成長していった。この組織は、女性が、男や男の子のためのラグビーに助力を提供する労働、例えばラグビー・ウェアの洗濯、ラグビー選手への食べ物の提供、プレイしている夫や若い息子のための買い物・運転・助言、食卓でラグビーを話題にすること、夫がテレビでラグビーを見ている間、子供を静かにさせておくこと等々、を止めるように求めた。こういった一見単純なレジスタンス行動によって、私たちは、如何に女性の仕事が男性のスポーツに貢献しているのか、そして、この場合は「国益」のために勝手に利用されてしまっているのかを悟るようになった。

上述した WAR のメッセージは、「一般の人々」にも大きな影響を与えることになった。2節で述べたように、1970年代、各種フェミニスト団体の活動は活発であったとはいえ、「一般の人々」にフェミニスト団体のメッセージが届くことは稀であった。しかしながら、今回は「洗濯」、「その他の家事」、「ラグビーというスポーツの善し悪し」といった、家庭、さらに言えば慣習的な身体活動と直接結びつく身近な問題が焦点となっていたので、多くの家庭でこれらの問題をめぐる議論 (ときには口論) が行われたという<sup>9)</sup>。ギズボーンに住む女性 C 氏の家庭では、スプリングボック・ツアー事件直後の10月から11月頃にかけて、上記の問題をめぐる「口論」が絶えることがなく、結局、「私が息

子のラグビー・ウェアの洗濯を止めてしまった後、息子もラグビーを止めてしまった」という<sup>(10)</sup>。同じくギズボーンに住む女性 K 氏の家では、同時期に同じ問題をめぐる口論が続いた後、ラグビー好きの夫は不承不承ながら自分でラグビー・ウェアの洗濯をするようになったという<sup>(11)</sup>。

スプリングボック・ツアー事件の約 2 ヶ月後、以上のような状況が続いている中で、マルドーン首相の 3 選がかかる総選挙が同年 11 月 28 日に行われた。この総選挙では、国民党の敗北が予想される中であれほどの「内乱」的な出来事を経験したにも拘わらず、マルドーン首相が危機を何とか乗り切り、総議席 92 の半数 46 議席を僅かに 1 議席上回る 47 議席を獲得して (<http://www.elections.org.nz/elections/resultsdata/fpp-seats-won.html>)、辛うじて勝利を収めることになった<sup>(12)</sup>。しかしマルドーン首相 3 選の直後から、古い政府介入型の保護主義政策と借入金による公共投資が進められる中で、国家財政が極度に悪化し、さらにその後、ニュージーランド全体が深刻な経済不況に襲われた。こういった危機的な状況に対して、マルドーン政権は全く有効な対策を打ち出すことが出来ず、完全に統治能力を失っていった。世界的には、80 年代前半は、レーガンやサッチャーの新自由主義政策が推進され、フレデリック・ジェイムソンが言うところの後期資本主義の矛盾の世界的拡大（グローバル化）が露呈し始める時代であった。古いタイプの保守政治家であるマルドーンは、自ら後期資本主義の矛盾に対応する能力を持ち合わせていなかった。その結果、後期資本主義の矛盾への対応は、1984 年 7 月 26 日に「地滑りの勝利」を収めて政権の座に就いた、労働党のデイビッド・ロンギ（David Lange）首相が担うことになる。結果的にニュージーランドでは、労働党が、皮肉なことに従来の社会民主主義的政策から大きく逸れる新自由主義政策を展開する役回りを担わされることになり、ロンギ政権の著名な財務大臣ロジャー・ダグラスが推進する政策（1973 年の英国 EEC 加盟以来の課題である「大英帝国内前哨基地の遺制からの決別と英国に依存しない経済政策」を推進するために、市場原理を最重要視したロジャーノミクスと呼ばれる新自由主義政策）の下で、規制緩和、一部規制撤廃、富裕層減税、サービス税導入、社会福祉予算削減、医療助成金削減、補助金制度廃

止、海外投資自由化、保護貿易撤廃、郵便通信省改革（郵便・通信・金融3部門への分割及び通信・金融2部門の民営化）、国有資産売却などの大胆な改革が推進されていった。このような改革によって、財政赤字削減、財政黒字化、インフレ抑制、一時的な景気回復などの改善効果は現れたが、同時に新自由主義政策に必然的に伴う痛み、すなわち貧富格差増大、失業者大幅増加、倒産企業増加、海外への人材流出等々も顕在化していった。さらに、ロジャーノミクスによってもたらされた改善効果でさえも、1987年以降急激に薄れ、1980年代末には、ニュージーランドは再び深刻な不況に陥った。その結果、労働党は1990年の総選挙では政権を明け渡し、国民党のボルジャー政権が誕生することになった。

以上に述べた6年に亘る労働党政権の政策を、性別分業という観点から捉え直してみるならば、2つの点が特に注目になるであろう。1つは、ロンギ政権が、スプリングボック・ツアー事件以後、急に勢いづいた各種フェミニスト団体の要求を受け入れて1984年にスタートさせた女性省（Ministry of Women's Affairs）の政策である。初代女性省大臣に任命されたアン・ハーカス（Anne Hercus）は、発足直後から女性の地位向上を目指して活発な施策を打ち出していった。彼女は、まず最初にマルドーン政権が伝統的家族文化を壊すという理由で批准書の寄託を拒み続けてきた国連女性差別撤廃条約（United Nations Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women）を1985年1月に批准・寄託し、続いて女性就労者数増加策の提言、企業における女性エグゼクティブ増加策への助言、政府諸機関における女性上級職員増加策への助言、女性の地位向上をめぐる国際的責任に関する啓蒙活動、ドメスティック・バイオレンス法成立への提言、(両)親が働き続けるために必要な子供のための校外サービス（out of school services）の拡充策促進など目覚ましい成果を上げていった。このような意味で、スプリングボック・ツアー事件以後の性別分業変化を考える上で、女性省の創設は様々な出来事のラミフィケーションの中で最大の駆動力を発揮した出来事として評価することができるであろう。第2の注目点は、ロジャーノミクス政策によって労働力流動化が促進さ

れる中で、夫の給与だけに依存する伝統的な性別分業が崩壊し、好むと好まざるとに拘わらず妻の市場労働への参入が結果的に促進されていったことである。先に述べたギズボーンに住む女性 K 氏の家庭では、1980年代半ばは最も大変な時期で、「あの時期は、外で長時間働くようになって疲れ切って帰宅しているにもかかわらず、夫が昔ながらの家事・育児を期待するので口論の絶え間がありませんでした」という。やがてこの女性の家庭では、「不承不承ながら自分でラグビー・ウェアの洗濯をするようになったのと同様に、やがてぶつぶつ文句を言いながらも夫が家事育児を引き受けてくれるようになって、家庭内のトラブルは徐々に収まっていきました」とのことであった<sup>(13)</sup>。この話の中にロジャーノミクス政策がもたらした変化を受け入れざるを得なかったというやむを得ない事情を見て取ることができるであろう。

## 5. 結語

これまで論じてきたことを整理して、本稿のまとめとして次の2点を強調しておきたい。

1つは、現代のニュージーランドにおける性別分業とかつての伝統的な性別分業の間には大きなギャップが見られるが、こういった性別分業変容の分水嶺は、1980年代（スプリングボック・ツアー事件以後の約10年間）であったということである。現代のニュージーランドにおいて、中産階層のヨーロッパ系ニュージーランド人に、「なぜ男性がこれだけ多くの家事育児を分担するようになったのですか」と質問すると、「それは世代の問題ですよ（イッツ・ジャスト・ジェネレーション）」という答えが返ってくるそうである（大谷2011年：200頁）。私自身も、こういった曖昧なニュージーランド人の返答に、2000年以降なんども出くわしてきた。その度に、「家庭内で男女の役割分担が変わっていったのはいつ頃でしょうか」と問い直したが、「昔の記憶が曖昧になってきているのでね、よくは分かりませんね」と答える人がきわめて多いのが実情であった。2005年には、ニュージーランドの国営テレビ局 TV1 で、『青年女性

〈Sheilas〉』という72分のドキュメンタリー番組が放送され話題となった。このドキュメンタリーは、1960年代末からフェミニズム運動に関わってきたニュージーランドの有名なフェミニストの活動を描いた1977年 TV1 放映の番組、『女性たち〈Women〉』に出演した5名の女性<sup>(4)</sup>を再訪し、その後28年間に生じた彼女たちのジェンダー観と政治信条の変化についてインタビューを行うという興味深い番組である。しかしながら、この28年間に現実のジェンダー文化の方がかなり変化したので「今では概ね妥協できるようになった」という趣旨の発言が各人から繰り返されるのみで、いつどのような変化が生じたのかは明らかにされないままに番組は終わってしまう。こういった「曖昧な状況」が長いあいだ心にひかかっていたのであるが、2012年3月下旬、ウェリントンで調査を行っているとき偶然出会ったギズボーン出身の70歳代の女性3人グループが、家庭内の性別分業をめぐる「インターナル・ディバイト」に関して例外的に鮮明な記憶を持っている人達であったので、この3人グループの証言を他の断片的な証言や先行研究とつぎ合わせることによって、「性別分業の分水嶺は1980年代であることに間違いない」という確信を持つことができるようになった次第である。

もう1つは、活動的なフェミニストたちが、あれほど長く熱心で粘り強いジェンダー文化変革の取り組みを続けてきても、日本を含む多くの国の憂慮すべき「社会的事実」が示しているように、ジェンダー文化はきわめて根強い慣性力を示し、残念ながらなかなか変化の兆しを見せないものであるが、しかるになぜニュージーランドでは10年程度であれほどの変化を実現することができたのかという問題である。この問題を解く1つの手がかりは、男性支配の本性に関してピエール・ブルデューが『男性支配〈La Domination Masculine〉』の中で提示した洞察、すなわち「男性支配は、象徴暴力〈Le Pouvoir symbolique〉（その犠牲者にとっても、ソフトすぎて感知できない不可視の暴力）の典型例である」という明察（Bourdieu, 1998: p.7）を再評価することである。この書物は、ブルデューの著述の中でも周縁的な著作であり、しかも総頁数約134頁のコンパクトな書籍ではあるが、男性支配は、もう一つの強力な象徴暴力装置

である「学校教育」とともに、経済資本・社会資本・文化資本のきわめて微細で巧妙な作動を通して、性別分業をめぐる思考・認知の所与の基本カテゴリーを「自然的なもの」として男性及び女性の中に内面化して行き、結果的に各人の身体内に「ハビトゥス（感情・思考・行動の深く身体に浸透した癖）」を創り出し、この「ハビトゥス」が逆にプラクティスを生成・方向付けるプロセスを通して、文化構築物としての男性支配が「再生産」されていくメカニズムを、説得力をもって明らかにしたという点で重要な力作である。しかしながら、「ブルデューは、社会における女性の被支配的位置が、〈自然的なもの（something natural）〉ではなく、むしろ自然化されたもの（something naturalized）〉であることを示してはいるが、それにも拘わらず、それは悲観主義と政治的惰性を勧めるものであると見なされている」とマーティン・ウォレスが書評の中で指摘しているように（Wallace, 2003）、フェミニストの多くが、ブルデューのジェンダー論を、社会・政治変革に消極的な「現状維持理論」と見なしていることは事実である。ジェンダー論に限らず、ブルデューの「再生産論」、「ハビトゥス論」、「プラティク論」一般が、社会の被決定性を説明する「保守理論」と見なされる傾向があることを考慮するならば、なおさらフェミニストの多くが上記のようなブルデュー批判を支持したとしても不思議ではない。しかしながら、ブルデュー社会学の真骨頂は、最晩年の「グローバル化批判」や「構造化されながらも構造化していく」という有名な発言（ピエール・ブルデュー1995年NHK・ETV特集）に伺えるように、なぜ社会や文化を変革することが難しいのかを深層から学理的に解明しつつ、変革に向けての積極的な戦略を構築していく点にあると言えるであろう。ブルデューのジェンダー文化論を評価するポイントも基本的には同じであり、なぜあれほど多くのフェミニストの長期に亘る政治闘争にも拘わらず、ハビトゥスの慣性力が強すぎるためにジェンダー文化、とりわけ性別分業がほとんど変化しない国（日本はその代表例である）が、かくも多いのかを理解しつつ、戦略的な対応を進めていくための手がかりをブルデューの中に探し出すことが肝要である。

上述した手がかりとして、特に重要であると考えているブルデューの言説は、

「ハビトゥスは、意識的な学習やイデオロギー的な負荷といった次元の問題ではなく、プラクティスを通して獲得されるものなのである」という『男性支配』の中の一節である (Bourdieu, 1998: p.21)。古い不平等な性別分業を方向付ける「ハビトゥス」を転換しようと意図して、意識レベルやイデオロギー・レベルでいくら意図的な啓蒙活動（講演会、読書会、演説会、公開講座、ジェンダー学の大学授業等々）を続けたとしても、それが定型的な枠の中に収まっている限り、期待したほどの成果を収めることができないのは、「ハビトゥス」が日々のプラクティスを通して身体に深く浸透した癖あるいは染みであるからに他ならない。この頑固な癖あるいは染みを完全に抜き取ることは困難であるが、それをできるだけ多く除去していくことができるものは、スプリングボック・ツアー事件の後にニュージーランドにおいて生じたような職場、学校、アソシエーション、家庭といった身近な場での日常的プラクティスのズレにおいて他にはないと思われるのである。しかしながら、スプリングボック・ツアー事件のような人種・ジェンダー・スポーツ・政治の全体を巻き込むような文字通りの劇的な出来事は、待っていても都合よく生起する訳ではない。そのように考えるならば、日本においてもニュージーランド女性省のような機関を設置して、意識レベルやイデオロギー・レベルでの型どおりの行政活動に終始するのではなく、象徴暴力の微細性・隠蔽性を打ち砕くための触媒装置として職場、学校、アソシエーション、家庭といった場における日常的・持続的なプラクティスのズレを上から誘発していくことが、最も現実的な選択であると思われる。

### (注)

- (1) ギズボーン出身の女性J氏へのウェリントンでのインタビューによる。
- (2) 今日では、かつてのようなニュージーランド文化の「鑑」としてのラグビーという意味づけは失われてしまったが、再解釈されたラグビーの人気は、オールブラックス・ファンの多さに現れているように今でも続いている
- (3) スプリングボックの名称は、南アに棲息する偶蹄目科のシカによく似た、非常に足が速くすばしっこい動物、スプリングボックに由来している。
- (4) ウェリントン郊外に住む女性M氏へのインタビューによる。

- (5) ウェリントン郊外に住む女性 M 氏へのインタビューによる。
- (6) ギズボーン出身の女性 J 氏へのウェリントンでのインタビューによる。
- (7) テパパ・トンガレワ博物館の学芸員 B 氏への 1997 年のインタビューによる。
- (8) もちろん、「パケハ」という太平洋を基盤とする新たなニュージーランド白人のアイデンティティに反発する白人も少なくない。
- (9) ギズボーン出身の女性 C 氏へのウェリントンでのインタビューによる。
- (10) ギズボーン出身の女性 C 氏へのウェリントンでのインタビューによる。
- (11) ギズボーン出身の女性 K 氏へのウェリントンでのインタビューによる。
- (12) 労働党の獲得議席数は 43 であったが、総得票数では総有効投票数の 39% を獲得しており、国民党が獲得した総得票数（総有効投票数の 38.8%）を上回っていた。実は、1978 年の前回総選挙でも、労働党は総有効投票数の 40.4% を獲得し、国民党の 39.8% を上回っていたにも拘わらず、政権を取ることが出来なかったという事実がある。1978 年および 1981 年のこういった結果を受けて、死票が多く、総有効投票数の過半数以上の得票数が政権獲得に結びつかない小選挙区制度の「大弊害」が強く意識されることになり、ここからニュージーランドは、1990 年代に小選挙区・比例代表並立制に向かって改革を進めていくことになる。
- (13) ギズボーン出身の女性 K 氏へのウェリントンでのインタビューによる。
- (14) 『青年女性』というドキュメンタリーが取り上げたニュージーランドの著名なフェミニストは、画家のミリアム・キャメロン (Miriam Cameron)、セクシュアリティ・カウンセラーのアロマ・パーカー (Aloma Parker)、レスビアン作家のサンディ・ホール (Sandi Hall)、マオリ活動家で政治家のドナ・アワテレ・フアタ (Donna Awatere-Huata フアタ氏と結婚する前は Donna Awatere を名乗っていた)、そしてジャーナリストのマルシア・ラッセル (Marcia Russell) の 5 名である。

### 〈引用・参考文献〉

- 朝日新聞社 2012 年「男女の平等、日本 101 位に下落」朝日新聞 2012 年 10 月 25 日朝刊
- 大谷史子 2011 年「キーウィ・ハズバンド～現地レポート：ニュージーランドにおける家事育児の分担事情」『性別役割分業は暴力である』現代書館
- ピエール・ブルデュー 1995 年『ピエール・ブルデューとの対話 (1) 見えないものを見る』1995 年 5 月 11 日放送 NHK・ETV 特集
- Bourdieu, P., 1998, *La Domination Masculine*, Paris : Seuil.
- Crawford, S.A.G.M., 1987, 'Pioneering Women : Recreation and Sporting Opportunities' in a Remote Colonial Setting' in J.A. Mangan and R.J. Park (eds.), *From 'Fair Sex' to Feminism*, London : Frank Cass.
- Dickinson, J.1993. 'Picks, pans and petticoats : Women on the Central Otago goldfields', BA

- (HONS) dissertation, Otago University, New Zealand.
- Dominy, M., 1986, '1979 Convention : A Cultural Analysis', in *New Zealand Women's Studies Journal*, 2(2).
- Elwell, E., 1878, *The Boy Colonists : Eight Years of Colonial Life in Otago*, New Zealand, London : Simpkin, Marshall & Co.
- Fairburn, M., 1989, *The Ideal Societies and Its Enemies*, Auckland : Auckland University Press.
- Fougere, G., 1989, 'Sport, Culture and Identity' in D. Novitz and B. Willmott (eds.), *Culture and Identity*, Wellington : GP Books.
- Hausmann, R., Tyson, L. D., Zahidi, S., 2012, *The Global Gender Gap Report 2012*, Geneva : World Economic Forum.
- Holmes, M., 2000, 'Second-wave Feminism and the Politics of Relations' in *Women's Studies International Forum*, Vol.23, No.2, Oxford : Elsevier Science Ltd  
<http://www.elections.org.nz/elections/resultsdata/fpp-seats-won.html>  
<http://www.world-rugby-museum.com/>
- May, P.R., 1962, *The West Coast Gold Rushes*, Christchurch : Pegasus.
- Minto, J., 2007, *Race, sex, class ? and the Greatest of These is Class*, Christchurch : Lincoln Efford Memorial lecture to the Workers Educational Association
- Phillips, J., 1987, *A Man's Country?. The Image of the Pakeha Male — A History*, Auckland : Penguin.
- Pringle, R., 2005, *A Political Game*, ATOM Study Guide.
- Simpkin, G., 1994, 'Women for Aotearoa : feminism and Maori sovereignty', *Hekate* October 1, 1994, Brisbane : Hekate Press.
- Templeton, H., 1995, *All Honourable Men — Inside the Muldoon Cabinet, 1975-1984*. Auckland : Auckland University Press.
- Thompson, S.M., 1998, 'Women and Leisure in Aotearoa/New Zealand and Australia', in Harvey C. Perkins and G. Cushman (eds.), *Time Out?*, Auckland, New Zealand : Addison Wesley Longman Ltd..
- Wallace, M., 2003, Review of Pierre Bourdieu, *Masculine Domination*, <http://pmc.iath.virginia.edu/issue.503/13.3wallace.html>
- Watson, J., 1998, 'From the Frontier to Cyberspace', in Harvey C. Perkins and G. Cushman (eds.), *Time Out?*, Auckland, New Zealand : Addison Wesley Longman Ltd..